

日使頭祭

平成29年4月8日(土)

4月8日(土)、京都・大山崎の油祖離宮八幡宮において恒例の日使頭祭が行なわれた。当日は前日から降り続いていた雨も上がり満開の桜の中、メーカー、販売業者、関係団体の代表者ら油脂業界から100余名が出席。また総代会、地元関係者も多数出席し、油脂業界のさらなる繁栄や参拝者の無病息災を祈願した。

本年の日使頭(ひのかしら)は一般社団法人日本植物油協会の今隆郎会長(日清オイリオグループ(株)社長)が務められ、午前11時開式、献燈や湯立、祝詞奏上、玉串奉奠などの伝統神事後、次のように挨拶された。

「朝方降っていた雨もやみ、日使頭祭は滞りなく、荘厳に行なわれた。私が日使頭を仰せつかるのは今回で3年ぶり3回目となる。この袴を着ると、改めて身も心も引き締まる思いだ。油の神様を祝う行事である日使頭祭は、大変長い歴史がある。貞観元年(859年)に、ご神体がこの山崎の地に祀られ、翌年の860年に神社が建立された。その後、応仁の乱や幕末の戦乱など幾多の試練を乗り越えて、今日まで悠久の歴史を刻んできた。貞観年間に、この神社の神官が長木と呼ばれる、てこの原理を応用したえごま搾油技術を開発したという故事から離宮八幡宮を油脂産業の基礎を築いた神様として、長年にわたって進行の念を捧げてきた。また、油の商売も山崎の地から全国に広がった。離宮八幡宮が油脂産業の発祥の地として長年にわたって、多くの皆さまに語り継がれてきたということである。1986年には、こうした輝かしい語り継ぎ、業界の加護をお願いするという意味から、植物油協会と油問屋の皆さまとが力を合わせ、崇敬会という親睦団体を発足させた。これをベースにしながら、離宮八幡宮を今後も支援していきたいと考えている」「この長年にわたる歴史を製販一体となって語り継ぎ、油業界の発展に努めたい。離宮八幡宮は2013年に本殿などが文化庁の有形文化財として登録された。大変名誉なことである。そういう意味では文化面でも一層価値を高められたものと思う。植物油協会は油が戦後の貧しい食生活を支えてきたものと自負しており、えごま油に始まり、菜種油、大豆油、ゴマ油、コメ油、そして最近ではオリーブオイルやアマニ油など、いろいろな油種が出てきている。これからも、ますます油脂産業を発展させていきたいと思っている。加えて離宮八幡宮の良き伝統文化をしっかりとつなげていきたい」

この後は、社務所内に場所を移し「直会」が開かれた。一般社団法人日本植物油協会 齊藤昭専務理事の司会進行の下、はじめに崇敬会副会長の(株)マルキチ 木村治愛会長が挨拶。引き続き、日本植物油協会会長会社を代表して日清オイリオグループ(株)大阪支店 日朝真人次長が「厳しい状況に一変しているが、製販一体となって業界発展のため盛り上げていきたい」と強調した。直会は全油販連 宇田川公喜会長の乾杯の音頭で懇談会に入り、関西油脂連合会 木村頭治会長による油締めで散会した。

今年も境内では、関西油脂連合会のメンバーと『大山崎えごまクラブ』や地元の皆様による模擬店が催され、多くの参拝者で賑わった。また、イグサを「灯明の灯芯」にする「灯芯ひき」体験や、立木でえごまの実をしぼる「伝統の道具で油しぼり」体験など、油の歴史を知るうえでも有意義な祭りとなった。



湯立神事



日使頭による玉串奉奠



日使頭 今村日油協会長の挨拶



崇敬会 木村崇副会長の直会挨拶



全油販連 宇田川会長の乾杯



関油連 木村会長の油締め

(写真提供 油脂特報社)